大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

［浅井美智子先生最終講義ご報告］思想としてのリプロダクション：ルソーからフーコーを超えて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15943

2016年度コロキウム

［浅井美智子先生最終講義ご報告］

思想としてのリプロダクション
――ルソーからフーコーを超えて――

浅井　美智子

本日はお忙しい時期に、私の最終講義にお越しいただきありがとうございました。私は、大阪府立大学では、哲学・生命倫理学・ジェンダー論などの講義をさせていただきました。また、研究分野では、体外受精に代表されるような不妊治療について実証的研究をしておりました。とはいえ、私の研究歴のスタートは、ジャン=ジャック・ルソーの思想でした。ご存知のように、ルソーは自由と平等を追求し、フランス革命を準備したと言われる『社会契約論』の著者であるだけでなく、文学や教育の分野など西欧近代思想を余すことなく展開した思想家です。

しかし、私がルソーを研究しようと考えたのは、哲学や政治、文学や教育などの分野におけるルソーの考え方に共鳴したからではありません。むしろ、「自然」を物差しとするルソーの考え方に対する疑問がありました。ところが、ルソーは自伝的著作『告白』・『孤独な散歩者の夢想』において、自由について次のように述べています。「わたしは、人間の自由というものはその欲するところを行うことにあるなどと考えたことは決してない。それは欲しないことは決して行わないことにあると考えていたし、それこそわたしがもとめてやまなかった自由、しばしばまもりとおした自由なのであり、また、なによりもそのために同時代人を憤慨させることになっ

たのだ」(『孤独な散歩者の夢想』岩波文庫　106頁)。私は、この「欲しないことは行わない」ことを自由と呼ぶルソーには共感しました。私自身がまさに欲しないことをさせられることが苦痛でしかたなく、不登校の子ども時代を過ごしてきたからです。そこで初めてルソー思想を研究したいと思うようになりました。

私のルソー研究を導いてくれたのは、分野別でなく総合的に研究したスタロバンスキー・J（『透明と障害』）やカッシーラ・E（『ジャン=ジャック・ルソー問題』）です。さらに、フーコー・M、アガンベン・G、レヴィナス・Eらの思想やブルデュー・Pらによる社会史研究に導かれつつ、ルソー思想における「人間の再生産・生殖」の研究を進めるようになりました。ところが、同時的に「体外受精」という技術による生殖が現実化し、その実証的な研究に時間を割かれるようになり、いつしか私は生殖医療に関する実証的な研究をしている人間と目されるようになりました。どちらの研究に重きがあるわけではありませんが、退職後は思想として人間の再生産についてまとめたいと考えています。以下は、その端緒としての拙論「ルソー思想における性と生殖」[1]です。ご講評いただければ幸いです。

（最終講義は2017年３月29日（水）に行われました。）

[1] なお、本稿は、社会思想史学会大会（2017年11月４日）におけるセッション「社会思想におけるリプロダクション」の報告に依拠している。